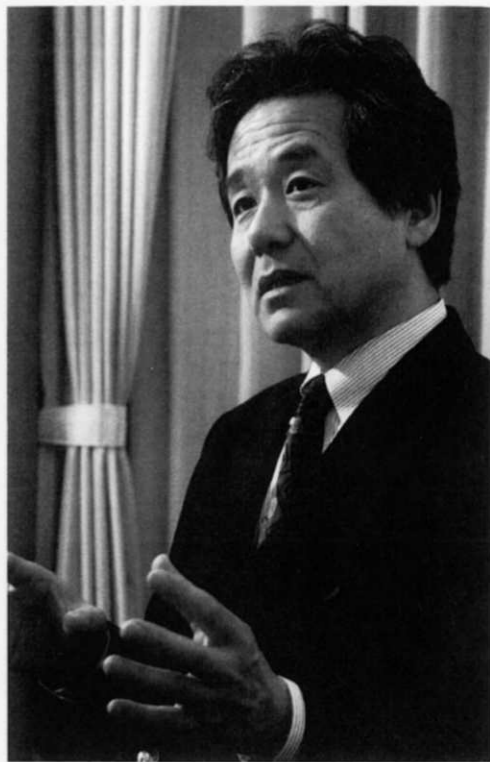


# 町を歩き、町を考える

「まちづくり」という概念は、翻訳が難しい。  
 長年、都市の景観計画やまちづくりにかかわってこられた今回のゲスト、  
 西村幸夫さんによると、あの「カラオケ」同様、そのまま日本語で通じる言葉なのだそうだ。  
 「町が教室だった」という西村さんにうかがう、町についてのあれこれ。



西村幸夫

Nishimura Yukio

×

神崎宣武

Kanzaki Noriaki



## 町並み保存

神崎●私が、西村さんのお仕事で実際によく見知っているのは、福井県の熊川宿です。小浜と京都をつなぐ鯖街道の宿場町ですが、いつごろから熊川に行かれるようになったんですか。

西村●一九八五年に初めて日本ナショナルトラストの調査で入りました。その前、一九八一年に福井大学のチームが伝統的建造物群保存対策調査を行い、ほとんどの建物の間取りを書き留めるような精力的な調査をやって立派な報告書を出しています。そこで熊川宿の町並みの貴重さがあらためて認識され、地元有志による町並み保存運動も始まるのですが、なかなか町全体の取り組みにまでひろがっていかない、という感じのころでした。

神崎●八〇年代というと、町並み保存ということに今ほど関心が高くない時期ですね。その停滞感は、想像できます。

われわれ民俗学のフィールドワークなどでもそうですが、いきなりノートやカメラを持ち出して、「さあ、話を聞かせてください

い」と言ったところで話が展開するわけではありませんしね。やはり土地の人との付き合いが大事になってくるのだと思います。調査はどのように進められるのですか。

西村●そうですね。正攻法で話しを聞いても、なかなか埒があかないところがあります。それで、私たちが調査に入ったときは、建物だけを調べるということではなくて、もっと地域の人たちの暮らしぶりを大事にしないといけないと考えました。具体的には、地元の熊川小学校の生徒たちとチームをつくって、地域のことをいろいろ調査したんです。

神崎●面白いアイデアですね。どんなことを調べたんですか。

西村●あそこは昔、葛細工が盛んだったんですが、ほとんど廃れかけていて一軒だけ残っていたんです。それで、子どもたちと一緒に葛を使って、どういうふうにも籠などの製品を作るのかを調べたり、作り方を習ったりしました。あるいは昔はいろんな川遊びをしていたんですが、今の子どもは川で遊んだりしない。それで昔はどんな遊びをしたのか、お年寄りに聞き取りしたり。そういうことをPTAの父兄を呼んで発表すると、すごく盛り上がりました。つまり、地域の

環境がどれほどふだんの生活に影響を与え、住民の暮らしを培っていたかを具体的に見ていったのです。そして、それらは近代化の中でだんだんとそがれていったけれども、そういうものをもう一度見つめ直すことが大切なのではないか、という提案に結びつけたりしたわけです。

神崎●それを継続的にやりになったんですか。

西村●ええ。調査は三年つづけましたし、調査が終わってからも、講演などで一〇回以上は行っています。調査を始めたころの子どもの文集が今も残っていて、卒業記念に製作したジオラマのようなものもまだあります。何年かたって地元で活動している方たちの集まりで話をしたとき、調査当時の小学生が高校生になっていて、ほくらよりでっかくなってるんです。ちゃんと話も聞いてくれて、感動しましたね。

神崎●時いた種が育つてますね。そうやって後からときどきいらつしやるのは、結局、この町をどうすればいいかというようなテーマでお話をされるのですか。

西村●そうですね。それと、いろんな外の情報を話してほしいといった要望もあります。

神崎●古い町並みをまったく元のとおりに戻すことはできませんが、当時の雰囲気に戻すというときに、何がいちばん問題になりますか。

西村●最近はどうでもなくなりましたが、ほくらが調査に入ったころは、住民は古い建物は恥ずかしい、古いつてことは甲斐性がないということだ、という意識をもつ方が多かったです。まわりはほとんど近代化しているのに、この町は乗り遅れたと思ひ込んでるんです。ですから、古い建物は魅力があるんだと、そういう意識をもってもらうことがいちばん大変でした。改修にあたっての技術的なことよりも、むしろ気持の問題のほうが大きいですね。昔の建物だと、やはり暗いとか寒いとかありますし、それを補修するということをおくめて、一般の人にとって改修するというのは、古い建物を壊して、新しい近代的な建物にするというイメージなんです。そうではなくて、今の建物にちよつと手を入れればよくなるし、住みやすくなる。完全に否定しなくてもいいものになるというの、何か具体的な例がないとイメージできないんです。

神崎●そのように意識を切り換えるには、や

はり外部からの視点が必要ですね。

**西村**●中の人は、かえってその価値を気づかないものですね。ですから、そのへんでわれわれの役割があるかなと思うんですよ。

**神崎**●そして、地元のキーパーソンになる人としてしっかりした信頼関係を結ぶ。

**西村**●ええ。熊川の場合は地元にも行政側にも何人かいらして、アドバイザーとしてわりとバランスよく意見を言えました。その意味では、出だしはぎくしゃくしましたが、ある程度動き出してからは、ほんとうに地元の力でレールに乗って走ってきたということですね。

## 伝統の分断

**神崎**●どうにも手こずって、結果的にうまくいかなかったというような例は。

**西村**●ありますね。あまり多くはありませんが。そういうとき何がいちばん問題かという、行政側の対応がまったくできていないことですね。住民だけではいろんな情報も入ってこないし、どっち向きに努力しているのかも分かりません。何らかのかたちでアドバイスしたり、活動がだんだん育って

くれば事務局的なことをやったりとか、行政には活動が育っていくのを見守る役割があると思います。それができないところは難しいですね。

最近はずいぶんなりましたが、かつては中央のカネをいかに地元にもってこられるかが優秀な政治家とされる風潮がありました。地元立派な道路を通すのが政治家の務めというような開発指向の首長だと、地域の文化とか歴史にもあまり興味がないんですね。そうしたところでは、おのずと行政の対応も期待できない。

**神崎**●それぞれがもっている文化の基盤が違いますから、ヨーロッパと日本を単純に比較してはいけません。たとえばドイツの南部へ行きますと、ライン下りの観光ルートを外れた、車で一時間も奥に入った小さな町でも、あれは何建築というんですかね、木が入っている……。

**西村**●ハーフティンバーですね。**神崎**●そういう伝統的な建築様式が、町全体に残っていて、レストランにしてもチーズ工場にしても建物の生かし方が上手で、その町が完全に一つの小宇宙になっている。けっして他から孤立しているわけではなく、か

なり行き来もあるんだけれど、中世以来そのままま自立自給の村や町であるかのように見えます。あれは何が違うんでしょうか。日本の場合は、江戸時代ぐらいまでたどって雰囲気として再現できたといっても、人間の暮らしがそこで自立しているようには見えませんが。

**西村**●ああ、そうですね。場所にもよりますが、昭和三〇年代ぐらいまでは、建物と土地の関係とか、コミュニティの関係とかは、それなりに持続性は保たれていたんじゃないかと思います。その後、非常に急速に変化したんですよ。戦後復興、高度成長というのがコントロールできないぐらいのスピードと密度で進んで、都市化が広がって人口も増えた。非常に規模が大きくなって急速な変化が、歴史的なものを否定するかたちで集中的に進んだんです。ヨーロッパの人口の増加とか、農村から都市への人間の移動とかのスケールとスピードと比べると、日本ははるかに大きいし、速いんです。

**神崎**●ええ。**西村**●それは一つには、日本の戦後復興、経済の再生が、伝統的なものを完全に否定する仕組みの中で始まったということが大きい

だと思っています。日本は、明治維新にしてもそうですが、古いものは改善されるべきものであるという発想が進められてきた。だから、古いものに対して自信をもてなかったし、過去のものはよくなかった、という意識をもつようになったんじゃないでしょうか。

**神崎**●「たら・れば」を言っても仕方ないですが、日本は街中をトラックやバスが走り抜

ける。モーターゼーションの時代が到来したとき、大量物流のための道路は、町の外郭を通すというセンスが道路行政になかったのは残念です。それは、逆に言うと江戸時代の街道整備がうまくいき過ぎていたせいかもしれません。熊川にしても、会津の大内にしても……。

**西村**●ああ。道は広いですね。

**神崎**●ええ。だから、バスやトラックなどの近代交通を江戸時代の道路で通すことができた。それがある意味で、仇となったんじゃないか。ヨーロッパで、街中に石畳の道や古い建物が残るといふ理由の一つは、それらを壊して街中の細い道を拡幅したりするより、外郭に新たな道を造ったほうが安上がりで早いということだったのかな、と思ったりします。

**西村**●なるほど。日本の場合、城下町の表筋などはきちんとしますが、一方で裏側のはり狭いですね。その狭さが

人間が通るヒューマンスケールなんで、車のスケールとは違うわけです。そこが日本は全然対応できていない。もつと外側に大きな道路をつくって、そういう路地は別のもので残す、という発想にはならない。全部同じでなければならぬ、と。

**神崎**●すべて一律に(笑)。

**西村**●それが平等だ、というふうになったところがありますね。だから、日本の道路幅は四メートルないといけない、ということになっていきます。ところが裏道のすべてが四メートルなければいけないかというと、そんなことはないですよ。だけど、一応ルールを決めたから、そっち向きに走ったんですね。制度そのものが伝統的な空間を否定するような、そういう仕組みでここまでできた、というところがあるような気がします。

**神崎**●運搬路にこだわって言うと、江戸時代の倉敷なんかは、運搬路は川なんです。そうすると川があるかぎり、そこへは自動車道路は通じにくい。今の倉敷の景観を考えると、メインストリートが川であったということの意味は大きいと思います。ただ、あの大原美術館のある一画だけが残っているんです。ちよつと特殊街区ではあるんですが。



西村幸夫 (にしむら・ゆきお) ●1952年、福岡市生まれ。東京大学大学院工学系研究科教授。工学博士。専攻は都市計画、市民主体のまちづくり論など。05年10月まで3年間、国際記念物遺跡会議(イコモス)の副会長を務めた。理事も含めると通算9年間イコモス本部の運営に携わり、審査した遺産件数は約400件に及ぶ。主な著書に『西村幸夫 風景論ノート』『西村幸夫 都市論ノート』(ともに鹿島出版会)、『都市保全計画』(東大出版会)、『町並みまちづくり物語』(古今書院)など。



神崎宣武（かんざき・のりたけ）●1944年、岡山県美星町生まれ。民俗学者。旅の文化研究所所長。郷里では、岡山県宇佐八幡神社宮司も務める。最近の研究テーマは、「民間の神仏」「酒肴の習俗」など。著書に「江戸の旅文化」、「三々九度」（ともに岩波書店）、「盛り場のフォークロア」（河出書房新社）、「まつり」の食文化（角川書店）など。

**西村**●倉敷が残ったのは、やはり大原総一郎ですね。戦前の段階から、これはいいんだと思う人がいて、評価したからですね。ヨーロッパをまわって、倉敷を日本のローテンブルクにしたいと思ったというのが、七〇年ぐらい前のことですから、まさに慧眼ですね。

## 文化的景観

**神崎**●世界遺産に登録されたものを見ていると、日本は街道文化というものを、もつときちつと検証すべきなんじゃないかと思いま

**神崎**●これまでは建物単体を文化財とみて、それから町並み、集落景観というような群れで見えるようになった。無理を承知で、もういちど江戸期に返って街道というのを再現できないかと考えてみるんですが。中山道、木曾街道よりもっともつとマイナーですけれど、いま出雲街道の勝山から新庄までの道の復元を提案しているんです。松江の殿様しか参勤交代に使ってないんですが、一つの国の殿様が通るだけでも、それだけの整備がされているんです。

**西村**●二〇〇四年に文化財保護法が改正されて、文化的景観というのができました。それで街道とか往来とかいうものも文化的景観だということ、いま重要文化財的景観の候補をピックアップしているところなんです。まだまだこれからなんです。ようやくそういうこともやれるようになってきました。

**神崎**●もしかしたら陸の街道よりも、川の運搬路のほうが早く手をつけられるかもしれませんね。日本の川は地形に従って急峻ですから、それが中心の交易路にはならないんですが、引き込み水路としてはいろんなところで機能を伝えて残っています。灌漑用水にしても、たとえば常陸のあたりに行

す。江戸時代の街道は、道路幅一つにしても、側面の水路にしても、川堤にしても非常に整備されている。これはケンペルやフィッセル、シーボルトが書いているとおりです。参勤交代を幕藩体制の中心的な制度にした以上、今で言う国家事業で街道整備を行った。しかも列島を網の目のように張りめぐらした。主要街道だけをとっても相当な距離ですよ。したがって参勤交代が動いていない農閑期には、農民たちも伊勢参宮なんかをするわけです。そういう旅を誘発した江戸の街道行政というのは、やはり世界遺産にするべきだと、私なんかは思うんです。

**西村**●なるほど。

**神崎**●トーマス・クックが旅行業の開祖のように言われていますが、ヨーロッパの貴族の師弟のグランドツアーを世話したわけじゃない。彼がやったのは、産業革命以後の鉄道旅行ですから、一九世紀のことです。日本の場合にはもう一七世紀に、たとえば伊勢の御師などは、今で言う総合旅行業を始めているんです。各地に伊勢講をつくって、そこを管理して代参者を地方ごとにまとめ、て案内し、途中の宿場、峠越え、代官所謂

けば相当な数が残っていますね。

**西村**●近世の景観として、水との関わりでいうと、やはり江戸時代に開発された灌漑用水もはずせませんね。一度つくった水路はなかなか壊せないし、水利権もあるから、いまだにそれこそ遺産として残っている。川とか舟運、水路を見直すというのは、ある意味で象徴的なことかもしれませんね。つまり、東京とか大阪の小河川は、そのほとんどが蓋をされて、道路とか緑道になっていく。その蓋をはがして、また川に戻そうというような動きも出てきています。これまでの道路行政に対する反省、新たな都市景観の創造ということでしょうか。

## 世界遺産登録申請

**神崎**●最近では、江戸時代における遺産に目を向けて、登録申請を行おうという動きがかなりの数で出ています。だけど、ちよつと疑問に思うところがあります。つまり江戸時代は外国との交易をほとんど遮断して、内国政治、内国需要、内国流通だけで二百数十年を経ています。きわめて特殊な文化が、いわばドンブリの中で攪拌されているわけ

べなどの世話をしています。そういう街道と宿場と旅ということで言うと、江戸時代の街道文化というのは、私は世界遺産に相当すると思うんです。しかし、残念なことに、宿場は単体でしか残っていない。街道文化といえるものを総合的に示すものが残っていないんですね。

**西村**●確かにそうですね。木曾街道は部分的にはかなり残っていますが、例外的ですね。大半は自動車交通のための国道になって……。

**神崎**●宿場の業種なんかをとってみても、木曾街道が江戸時代の街道を象徴するとは、ちよつと思えませんね。だから、東海道とは言いませんが、西国街道とか奥州街道なんかのどこかが残っていれば、と思ったりもするんですが、もうほとんど追跡できませんね。

**西村**●国道からそれて、旧道のほうをちよつと寄り道すると、そこにエアポケットのような空間が残っていることがありますね。古い社寺とか、昔の名残を感じさせるものか。そうした旧街道の痕跡のようなものが見えてくると、もの見方も変わってくるかもしれない。

です。そういつた国の体制は、世界にはあまりありません。だからユネスコなんかで説明会を開いても、その大前提が、背景となるものが説明できなければ、街道文化にしても灌漑水路にしても、簡単には分かってもらえないでしょうね。それで世界遺産に以前から関係されている西村さんに向かって、その国の中で日本の江戸というのはどう思われているんでしょうか。

**西村**●世界遺産の暫定一覧表をつくるために、都道府県に提案を求めたことがありますが、そのなかに江戸時代が中心になっているものがいくつもありました。お城とか城下町とかがあって、木曾街道、中山道と妻籠の周辺も出てきました。世界遺産というのは、世界の中に多様な文化があるということ、きちんと思えるようなリストなんです。それで神崎さんがおっしゃるような、江戸時代の社会システムは非常にユニークであって、世界から見ると特殊な発達を遂げた文化だと思われる。その他の国にはない文化でありようとしての城下町や宿場町が出れば、それは論理としてはかなり説得力がもてるんです。ただ問題は、江戸文化を代表する典型的なものが、その当時のまま全部が揃っ

ているかどうかですね。萩なんかは城下町としては、日本の中では残りがいいと思うんですけど。お城だけとか、パークであればあるかもしれませんが、都市全体を表すというのはなかなか。

**神崎**●線とか、面で、という捉え方がなかなか難しい日本の近代でしたよね。

**西村**●ただ、前向きな評価をするとすれば、

日本の中の伝統的建造物保存地区だという発想にとどまっていた城下町や宿場町でも、

世界遺産の暫定一覧表に提案するというときに、たとえば妻籠<sup>つまご</sup>は、江戸時代に発達した世界でもユニークな街道の宿場町である

というような、そういう仕組みの一環として考えるならば、世界に打って出ることが

できるということが分かったわけです。ユニークだと思ったのは、最上川というのを

山形が出した。これは川ですけれど、最上川にまつわる様々な舟運の仕組みや川にまつわるいろんな儀礼が非常に色濃く全域に

残っている。それが全体として大事なんじゃないか、という提案なんです。部分的に

名所や史跡になっているところはあるんですけど、最上川を一つとして見て、そこに価値を見出すということは、これまであんま

り考えてこられなかったわけですよ。その意味では、非常に新しいものの見方を提起してくれた。そんな目で最上川を見つめ直して、もつとこんなところがあるというような県民運動が生まれてくると面白い。

**神崎**●申請を通じ、いろんな意識の芽生えがあるんですね。私も少ししかかわったことですが、小浜と福井の白山、鳥取の三徳山、出羽三山、宇佐の八幡信仰など、神仏習合に

関連した案件もいくつか出ていますね。この神仏習合を世界に向けて説明するのはなかなか難しいことですが……。

**西村**●でも、発想はすごく面白いですね。

**神崎**●そう、世界的に稀だから説明が難しいとも言えるわけで。登録できるかどうかはひとまずおくとしても、戦後教育の中で曖昧にされた精神文化を、世界に向けて歴史的に体系づけて説明できるか、というトレーニングだと考えれば、意義のあることだと思います。

ところで、今あちこちの大学で世界遺産や文化観光を取り上げるコースが出てきています。西村さんのゼミでは、どんなご指導をされますか。

**西村**●私自身のことを言えば、いちばん学

だのはおそらく現地調査でそれぞれの町で出会った人びとからです。ある種、町が教室だった。というか、私が学生だった時代は、町づくりや町並み保存といったようなことが講義としてもなかったんですね。今、私もいろんな調査プロジェクトを頼まれて、学生を動員して現場に送り込んでるわけです。すると、学生の顔つきを見てるとやっぱり現場に行つてるときがいちばん生き生きとしてる。今の学生は、親に守られながら人工的な環境のなかでお勉強をずっとやってきたという感じが

ありますよね。本当のリアリティを持った生活に直面する機会があまりなくてしまっている。ですから、現場に行つてワツと、放し飼いやないけれども(笑)。そうすると、彼ら自身でテーマを見つかったりいろいろやって、あんまり言わなくてもいいんですよ。

私がそうであつたように。

**神崎**●西村さんのところはね(笑)。いや、でも現場主義を尊ぶ教育は、今ほんとうに重要だと思えます。その意味でも、ますますのご活躍を期待しております。ありがとうございました。

二月二日・八重洲にて  
撮影：野口賢一郎